

【論文】

鳥根県松江市における初期テレビ受容について

三好亜美*・浜田幸絵**

(*鳥根大学法文学部卒業生)

(**鳥根大学法文学部)

摘 要

本研究は、鳥根県松江市における初期テレビ受容を、文献資料と聞き取りを組み合わせて明らかにした。都市部の状況を中心に構成されてきたテレビ史の通説は、日本テレビが設置した街頭テレビによってテレビという存在が人々に知れ渡り、皇太子ご成婚パレードをきっかけにテレビが各家庭に普及したというものであるが、日本テレビの街頭テレビが設置されたのは主に首都圏であり、松江市では皇太子ご成婚時にはまだテレビ放送は始まっていなかった。本研究では、文字資料にはほとんど残っていない、地方のごく普通の人々がテレビという新しいメディアをいかに受容していったかを、オーラル・ヒストリーを活用して描き出し、松江市の場合は都市的な側面と、地方・農村的な側面の両面があったことを明らかにした。

キーワード：テレビ史、地方都市、オーラル・ヒストリー、教育、娯楽

はじめに

テレビ放送の歴史について、主に語られるのは首都圏での動向である。日本では1953年2月にNHK、同年8月に日本テレビがそれぞれ放送を開始した。初期のテレビを語る際によく言及されるのが、「街頭テレビ」と「皇太子ご成婚パレード」である。街頭テレビは、一般家庭にテレビが普及する前の段階で広告効果を生み出すため日本テレビが考案した仕掛けである。1953年8月に新橋駅西口広場に設置されたのを皮切りに21インチや27インチの受像機が盛り場に設置され、プロレスや野球が放送されると路上に黒山の人だかりができた¹。1959年4月10日の皇太子ご成婚パレードは、テレビの普及台数を一挙に押し上げた国家的行事である。皇太子妃となった正田美智子さんの愛称から名付けられた「ミッチー・ブーム」²も相まって、結婚の1週間前にテレビの受信契約数は200万台（普及率11%）を突破、前年5月の倍になった³。しかし、こうした「街頭テレビ」と「皇太子ご成婚パレード」中心のテレビ史は、日本各地のテレビ受容の実態とは乖離していると考えられる。その理由として第一に、日本テレビが街頭テレビを設置したのは全国278ヵ所、そこに福島、静岡、長野、新潟の繁華街も含まれているが、圧倒的大多数は首都圏、特に23区内に置かれている⁴。また第二に、皇太子ご成婚の1959年4月時点でテレビ局が開局していなかった地域も、意外と多い。本稿で取り上げる鳥根県松江市

においてテレビ局が開局したのも1959年10月末のことである⁵。

近年は首都圏の外に軸足を置いたり、地方における展開に目配りをしたりしたテレビ史研究も活発になってはいる⁶。しかし、「首都圏をはじめとする都市部ではなく、地方でのテレビ受像機の普及については、資料がきわめて乏しい」⁷といわれてきた。テレビという新しいメディアが人々にどのように捉えられ生活の中に入り込んでいったかを実証的に明らかにした研究は、太田美奈子による青森県を対象とした研究⁸と飯田崇雄の「『モノ＝商品』としてのテレビジョン」があるにすぎず⁹、特定の地域の状況を具体的に分析しているのは太田の研究だけである。太田の代表的論文（「青森県下北郡佐井村における初期テレビ受容」）は、青森県下北半島西部に位置する漁村・佐井村における、テレビ購入の動機から影響までを包括的に調査している。この村は、1957年～1959年の2年間に青森県内でテレビが最も普及し「テレビ村」と呼ばれた。研究方法としては、新聞、教育委員会や放送関係の雑誌、村議会の議事録等を調査するとともに当時のテレビ普及に関して重要な役割を担った方のご子息、教育関係者を中心に聞き取り調査を行っている。結果として佐井村ではテレビを視聴覚教材として学校に設置し、都市部から離れた僻地の子どもたちを、全国的な高度経済成長期の波にのせる手段として活用したことが明らかになっている。

本稿では、鳥根県松江市におけるテレビ受容を、文献資料と聞き取りを組み合わせで明らかにする¹⁰。松江市のテレビ受容期は遅れて到来したこともあり、2022年時点で実施した聞き取り調査から、テレビ受容の様相を一定程度描き出すことができた。地方で生きた人々の生活が、テレビという新しいメディアが入ってきたことでいかに変容していったか、「一億総白痴化」¹¹のフレーズが流行する裏側で、テレビに期待された教育的効果がいかなるものであったかを浮かび上がらせたい。第1章では調査地松江市とそこでのテレビ放送開始の概略を確認し、第2章では研究方法について述べる。第3章で、聞き取り調査や文献資料をもとに松江市においてテレビがどのように受容されていたのかを具体的に分析する。

1 調査地・鳥根県松江市とテレビ放送

内藤正中によると、鳥根県は1950年代に政府公式文書で「裏日本」と呼ばれ、国内でも特に発展が遅かった地域である。1959年の「全国消費実態調査」は、全国的には生活の現代化・洋風化が急速に進んだことを示しているが、鳥根県の場合は個人貯蓄・耐久消費財保有・農村の洋風化・レジャーの指数が全国水準の半分であった¹²。表1に、1959年3月末と11月末の中国地方5県のテレビジョン受信契約数と普及率を示すが、テレビの普及も、他の4県と比べて鳥根県では遅れていたことがわかる。

表1 中国地方のテレビジョン受信契約数と普及率

	鳥根	広島	岡山	山口	鳥取
1959年3月末	401 (0.2%)	33,284 (7.2%)	17,457 (5.0%)	24,411 (7.0%)	877 (0.7%)
1959年11月末	3,918 (2.1%)	62,180 (13.1%)	33,561 (9.5%)	52,485 (15.1%)	7,587 (6.3%)

出典：鳥根県総合振興計画審議会編『鳥根県総合振興計画』鳥根県、1961年、330頁、「(資料)日本のテレビジョン」『新聞学評論』10巻、1960年3月、220頁より浜田作成。

一方で、松江市は県庁所在地であり、鳥根県と鳥取県を合わせた山陰地域のほぼ真ん中に位置する。後述するように、山陰におけるテレビ放送はまず鳥取市で始まるが、松江市ではその電波を受信することができ、NHKの放送局(ラジオのみ)も置かれていた¹³。テレビという新しい家電の宣伝と販売において重要な役割を果たした電器店や百貨店も存在し、住民のテレビへの関心は放送開始前から高かったと考えられる。1959年8～9月に、鳥根大学教育学部附属幼稚園と松江市立白濁幼稚園に通う園児の家庭のテレビ普及率は37.5%であったというデータもある¹⁴。松江市、とりわけ今回聞き取りを行った方の多くが居住していた中心部は、鳥根県内では早い段階でテレビの普及が進んだ地域であったといえよう¹⁵。

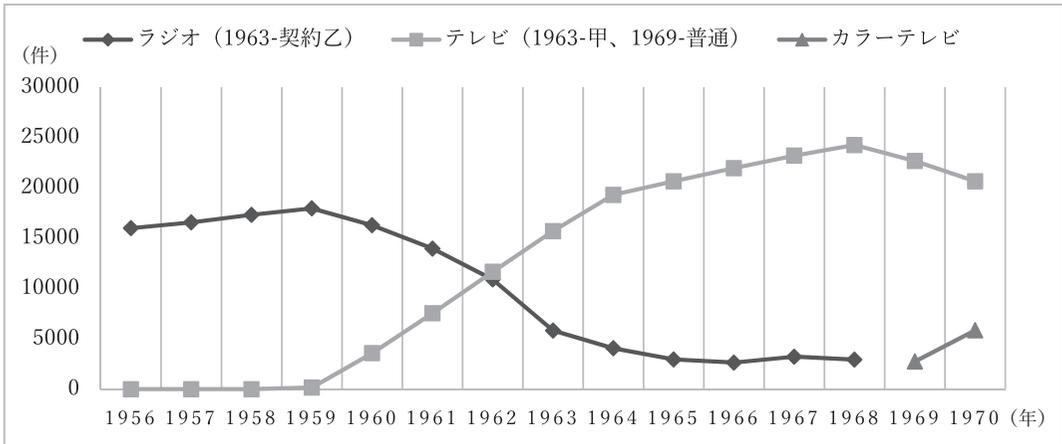
山陰における放送局の設立経緯も確認しておきたい。日本のラジオ放送は日本放送協会に独占されていたが、占領期の放送改革の中で民間放送が始まり、(中央集権的ではなく)各地域に根差したローカル放送が志向された¹⁶。山陰初の民間放送局は1953年12月18日に米子に開局したラジオ山陰(1961年に山陰放送に改称)である。1951年8月以降、日本各地で多くの民間放送局が新聞社の出資で設立されていたが、ラジオ山陰は新聞社を母体とせず、社屋もパチンコ屋の2階を借りるような状態であった。ここには山陰における放送事業の未来を明るくものとして必ずしも見通せなかったという地域事情もあったようだが、ラジオ山陰は1954年10月には松江支局、1955年11月には鳥取中継局を開局し、社業を軌道に乗せていった¹⁷。

1957年に郵政省がテレビジョン放送用周波数割当計画(チャンネルプラン)を発表すると、山陰からはラジオ山陰と日本海テレビ¹⁸の計画が申請され、10月に鳥取市の予備免許が日本海テレビに、鳥取鳥根県境の予備免許がラジオ山陰に与えられた。日本海テレビは、ラジオ山陰と競合関係にあることを意識して放送開始を急ぎ、会社設立1年後の1959年3月3日に、マイク回線が開通していないにもかかわらず放送を開始した。さらに民間放送局に後れを取るまいとNHK鳥取放送局も、同日にテレビ放送を開始する¹⁹。

このような経緯で山陰におけるテレビ放送は鳥取市で始まった。その後枕木山にテレビ放送所を開設して1959年10月28日にNHK松江放送局がテレビ放送を開始、12月15日にラジオ山陰がテレビ放送を開始した。UHF局が認可されるようになると、1970年4月には鳥根県に本社を置く山陰中央テレビが山陰中央新報社を母体として設立され、1972年には山陰のほぼ全域でNHK総合と教育、民間3局の放送が見られるようになった²⁰。

図1は1956年から1970年にかけての松江市のラジオとテレビ、カラーテレビの契約数である。1962年3月に、ラジオの契約数をテレビの契約数が上回っている。前述のように、1959年8～9月に、鳥根大学教育学部附属幼稚園と松江市立白濁幼稚園に通う園児の家庭のテレビ普及率は37.5%であった²¹。NHK松江放送局の調査では1960年12月末日の松江市のテレビ普及率は29.4%となっている²²。市街地では皇太子成婚前後に、テレビを購入する世帯が出てくるようになり、その後の2、3年で急速に普及したと推測できる。

図1 松江市のラジオ・テレビ受信契約数



出典：日本放送協会編『放送受信契約数統計要覧』(昭和30年度～昭和44年度)、日本放送出版協会より浜田作成
注) いずれも3月末の契約数。受信契約は1956～1962年まではラジオ契約とテレビ契約、1963年～1968年までは契約甲(全ての種類の放送の受信)と契約乙(ラジオ放送のみの受信)、1969年～1970年は普通契約(テレビのカラー以外の受信)、カラー契約(テレビのカラーを含む全ての受信)に分かれていた。

2 研究方法

本研究では、島根県松江市の初期テレビ受容を知る手掛かりとして、1950～1970年の新聞や統計書、郷土史などの地域史料、放送関係の雑誌等の調査を行った。しかし、地方のごく普通の人々のテレビとの出会いや高額なテレビを購入するに至る動機などについては文字資料に残っていない。これらについて「オーラル・ヒストリー」²³を用いて明らかにした。

オーラル・ヒストリーは1950～1970年に島根県松江市に居住していた方を対象に、原則対面形式で三好が用意した質問に回答していただく形式で2022年8～12月に行った。聞き取りを行った方は計13人で、表2がその詳細である。個人情報保護の観点から匿名化している。

対象者には、初めてテレビを見た経験やテレビで見た内容、松江市での普及の様子などについて語ってもらった。事実確認という側面以外にも、語り手の話しぶりから感情や記憶の仕方などの思考特性の側面にも目を向け、初期テレビ受容を通じた当時の松江市の人々の体験について明らかにすることを目指した。もっとも、対象者には半世紀以上前の経験について語ってもらったわけで、記憶が曖昧になっている点や意識・無意識による逸話の創作も考えられる。飯尾潤は、時間の経過により記憶が曖昧になったり、話者の立場が当時と変わっていたりすることが語られる内容に影響を与えることは否定できないとオーラル・ヒストリーの問題点を指摘する²⁴。一方で「当事者が出来事や経験、思考内容を語るということには、他では得られない重要な情報が含まれていると考えるべき」²⁵とオーラル・ヒストリーには大きな価値があるとも考えている。メディア史の研究では、「送り手」側を対象としたオーラル・ヒストリーは比較的蓄積があるが、読者や聴取者研究に聞き取りを活用しようとする試みは少ない。読者・視聴者を対象にして聞き取りを行う場合、日常生活の中に埋め込まれたメディア体験を別出することの困難さも認識されているが²⁶、本研究ではオーラル・ヒストリーを用いて、山陰の地

表2 インタビュー対象者について

	仮名	性別	生年	居住地歴	備考
1	山田さん	男	1944年	白濁本町出身	
2	佐藤さん	女	1946年	白濁本町出身で、東京オリンピック(1964年)の際1年間だけ東京に移住	
3	鈴木さん	男	1950年	白濁本町出身で、大学進学で東京に移住	
4	高橋さん	男	1943年	白濁本町出身	電器店元店主
5	田中さん	男	1931年	末次本町出身で、18歳から7年ほど仕事で東京に移住	
6	伊藤さん	男	1941年	安来出身で、1961年から松江で勤務	電器店元職員
7	渡辺さん	男	1928年	松江市郊外出身で、1955～1965年まで松江市中心に在住	
8	山本さん	男	1933年	東本町出身	
9	中村さん	男	1951年	南田町出身	
10	小林さん	男	1943年	末次本町出身で、高校進学で東京に移住、大学卒業後Uターン	
11	加藤さん	女	1935年	外中原町出身	
12	吉田さん	女	1951年	松江市郊外出身	
13	佐々木さん	女	1949年	殿町出身	

方都市に生きたごく普通の人々のメディア体験を描き出すことを試みる。

3 松江市における初期テレビ受容の分析

本章では、聞き取り調査や文献資料の調査をもとに松江市においてテレビがどのように受容されていたのかを分析する。3-1では初めての視聴体験、3-2では教育としてのテレビ視聴、3-3では娯楽としてのテレビ視聴、3-4では電化製品としてのテレビについて取り上げる。

3-1 初めての視聴体験

NHK 松江放送局がテレビ放送を始めたのは1959年10月28日だが、聞き取り調査では、それ以前にテレビ放送を見ていた人が大勢いたことがわかった。1943年生まれの高橋さんは中学生の頃の体験について「松江に放送[局]がなくて岡山と広島しかなかった、ここは何もないときにその茶町のちっこい(小さい)電気屋さんは、部品なんかあつかつちょう(扱う)電気屋さんね、ちっこい(小さい)テレビを用意してそこで店の前で相撲なんかを映されてて、それが見たくてカバンなんか置いて見に行くよった(行っていた)」²⁷と、NHKが松江でテレビ放送を開始する前にテレビを見ていたと話す。どうしてテレビを見ることができたのかという問いに対しては「4m ポールを3本くらい繋いで高くあげて、それを針金でバツーと引っ張って、アンテナはでかいでかいやつ2本立たせて2本を一つにまとめると電波を強く拾う。ここで何で岡山[の電波が]いけたかって言うと広島は中国山脈でね、入らなかった。で岡山はちょうど[山脈に]空いたところがあってそこから電波を[拾った]」と岡山県から電波を拾っていたと言う²⁸。高橋さんは無線を主に取り扱う電器店の息子として生まれているが、自分の家よりも早くテレビを持ち、非常に大きいアンテナを取り付けていた家が末次本町にあったため、驚いたそうだ。

新聞では、松江市でテレビが鮮明に見られるようになったのは、NHK 鳥取局と日本海テレビが放送を開始した1959年3月3日以降のこととされている。1959年3月4日付「島根新聞」には、「NHKの話ではこの鳥取放送局のテレビ放送で島根一万四千世帯、鳥取十万世帯（県内世帯の八三％）、岡山四万五千世帯、兵庫三万七千世帯がそれぞれ視聴可能で、島根の場合は出雲から以東の特に平野部が受像鮮明であるといっている。松江放送局では出雲部内のテレビは一応視聴料の対象として近く実地の調査を行うが、ボツボツ視聴申込み舞い込み、出雲部だけですべり出し四、五百台の契約はできるのではないかと予想をたてている」²⁹とある。ただ、高橋さんが言うように、山陰地方でテレビ放送が始まる以前にも、テレビが視聴されていなかったわけではない。『新聞に見る山陰の世相百年』には、鳥取にテレビ局が開局する以前にも、岡山県などから山陰に電波が来ていたが、中国山脈越えのため電波は弱く、テレビの画像は極めて不鮮明だったと記されている³⁰。また、1959年6月、大社町の理髪店が岡山から電波を受け客寄せのテレビを設置したが、同業者から吊し上げられ撤去したというエピソードもある³¹。

1959年4月10日の皇太子ご成婚の時に初めてテレビを見たという方もいる。1950年生まれの鈴木さんは「皇太子ご成婚は誰かの家で見たわ。近所の人みんな集まって、それは覚えている。近所の人で割と早くテレビをつけた人でそういう人の家に行ってみました。パレードの中継はね」と、ご成婚の頃に近所の家でテレビを見始めたそうだ。ほかにも、話を聞いた13人中11人が皇太子ご成婚をテレビで見たと語った³²。ただ、松江にテレビ放送局が作られる前だったこともあり、まだ一部の人の家にしかテレビはなかったという。

ではどのような人がテレビを持ち、同居人以外にも見せていたのだろうか。1944年生まれの山田さんは「医者さん、旅館とかそういうところ[しか持っていなかった]。親戚のお医者さんのうちで見た、美智子さんが綺麗だったわ」、1928年生まれの渡辺さんは「印象に残ったのはやっぱり美智子さんかな。美智子さんの時代に店で、店へ行って(店に行つて) [テレビを] 見た。八百屋さん[で]」と語る。富裕層や商売を営む家がテレビを持つのが早かったということである。

テレビ放送を初めて見たのは、松江市外であったという方もいる。1946年生まれの佐藤さんは、小学校6年生の時に修学旅行先の岡山の百貨店・天満屋で初めてテレビを見た。1928年生まれの渡辺さんは「[昭和]28年か9年に³³東京へ出とったことがある、で東京で見た。[東京で仕事の]研修があつて。その時にねえ大相撲がね、吉葉山ゆう(という)横綱がいた。その人が初めて優勝した日に見た。大雪が降っちゃった(降っていた)、東京の。それははっきり覚えちょう(覚えている)」と、仕事の関係で東京都に行った際、街頭テレビでテレビを初めて見たという。

首都圏を中心にテレビを広めるきっかけとなった街頭テレビは、時期は明らかではないが、松江市にも置かれていたことも、聞き取り調査からわかった。鈴木さんは「あつたよ、ちょうど今の大橋の南詰の所にあつて、今の源助公園とか[の近く]。ここは日立があつた。日立が広告するようにそこにビジョンをつくつて[いた]」と語る。1943年生まれの小林さんは「定かじゃないんだけど、山陰中央新報のあすこの角にあつたんですよ。[昔]市役所の[あつたところ]今の県民会館の[あつたところ]」と語った。ほかの方の発言も総合した結果、街頭テレビが置かれていた場所として、旧公会堂市役所前(現県民会館付近)、米子町、大橋南詰、旧日本海テレビ

支社（現殿町67）の前、が挙げられる。一方で「街頭テレビはね意外と流行ってないんですよ、話題の番組があるって人がたかることはあるんですけど、ほとんど通りすがりあーやっとなという感じです。あれはテレビメーカーさんとか、バックアップされるどころの宣伝媒体」と電器店の高橋さんは語る。首都圏での街頭テレビは、日本テレビが「テレビ」という存在を人々に知らしめ、広告効果を生み出すために活用されていたが、松江市に街頭テレビが設置されたのは早くても1950年代末であり、この頃には市街地の家庭ではテレビの購入が急速に進んでいた。街頭テレビはメーカーの宣伝のために置かれた側面が強かったと考えられる。

なお、山陰にテレビの電波が届くよりもかなり前の段階でも、松江の人々がテレビというメディアに接する機会があった。NHKの全国を巡回したテレビカーが1951年12月に松江市に到着、市中心部をパレードしたのち公会堂で5日間一般公開、14万4000人の来場者があったこと³⁴、1953年11月には松下電器のナショナル・テレビカーが山陰地方を巡回し松江では二日間白濁小学校で展示会を開催したこと³⁵が文献資料からわかる。NHKのテレビカーに接したという証言は、今回は得られなかったが、テレビがある程度普及した後に、メーカーが車で商品を持ってまわり電器屋さんが公民館等で販売していたという話を聞くことができた。

3-2 学校教育の中のテレビ

次に、教育という側面から松江市でのテレビの普及について考察する。青森県佐井村では、小学校でテレビを視聴覚機材としていち早く活用していたというが³⁶、松江市では学校教育にテレビが活用されていたのだろうか。

島根県教育委員会は全国的な視聴覚機材利用の流れにのって、1961年度に視聴覚教育振興3か年計画を策定し視聴覚教育を推進していった³⁷。具体的には、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・公民館・教育委員会等に、16ミリ映写機・幻灯機・8ミリ映写機・8ミリ撮影機・テレビ受像機・磁気録音機が設置されていった。表3は、松江教育事務所管内の幼稚園・小学校・中学校・公民館および島根県内の高等学校の視聴覚機材の1962年4月1日時点の設置状況を示している。幻灯機、磁気録音機に次いでテレビ受像機の設置台数が多く、かなりの数の小・中学校でのテレビ受像機が設置されていたことがわかる³⁸。

表3 松江市及び島根県内の視聴覚教材の普及状況（1962年4月）

	幼稚園	小学校	中学校	高等学校 *県内	公民館
16ミリ映写機	0	10	2	9	34
幻灯機	32	134	58	61	10
8ミリ映写機	4	40	16	17	3
8ミリ撮影機	3	24	12	20	5
テレビ受像機	17	97	35	29	6
磁気録音機	16	104	58	87	33

出典：島根県教育委員会『昭和38年 国と島根の教育』島根県教育委員会、1963年、224頁より三好・浜田作成注）高等学校については、島根県内の高等学校の機材数。ほかは松江教育事務所管内の学校等の機材数。

聞き取り調査では、学校の授業でテレビを見たかどうかについて話を聞いた。1950年生まれで小学校の授業の時にテレビを見たと言語鈴木さんは「理科の実験とかなんか全部それ見て授業を受けとった。学校教育用の番組。[番組の放送時間に]授業[時間を]合わせる。実験装置が揃わんから」と、理科の時間に実験などの映像を視聴していたという。ほかに、音楽の時間に名曲の鑑賞を行ったそうだ。1951年生まれの吉田さんは「[中学校の]道徳の時間とか HR の時間に、普段は[テレビは]ちゃんと飾ってある³⁹、HR (ホームルーム)の部屋に移動して、ひょっこりひょうたん島で言葉遣いをね先輩・目上の人に対して言葉を[話すという内容]」と、言葉遣いについてテレビで学ぶ時間があったと話す。佐井村のような標準語教育が意識されていたとは言い切れないが、言葉遣いの教育はされていたことがわかる。

次に、1951年生まれの中村さんは中学校のたしか保健室に白黒テレビがあり、学校の授業でテレビを見た経験があるという。「東京オリンピックがあったので。1964年ですね、中学校の時です。それでオリンピックがやってたので、オリンピックのどこの部分を見たのかは覚えてないけど、見たのは覚えてます。だから勉強として、体育の授業か。だからまあ、みんなが見れるような大きなテレビはないので、学級、1年3組さん、このオリンピックのを、体育で見ましょう。みたいな感じで学級が、学級単位で[見ていた]」と東京オリンピックをテレビで見た経験について語った。ほかにも、1949年生まれの佐々木さんは「高校生の時だったかな、オリンピックは学校で見たわ。なんか廊下にポーンと[テレビが]出でてあって。聖火が走ったときは学校から9号線までだらだらーっと[並んで見に行った]」とオリンピックを学校のテレビで見た経験や、聖火リレーを沿道で見た経験について詳細に話した。

学校のテレビでオリンピックが視聴されたことは、新聞資料からも裏付けられる。1964年8月25日付の「島根新聞」によると、松江市教育委員会では小中学校で夏休みを2、3日短縮し、オリンピック期間中に「オリンピックテレビ視聴覚教室」を設けることにした。同記事は「雑賀小学校は全教室にテレビを備えつけているが、小さな学校は大体1、2台しかなく全員がみられないので市教委は頭を痛めている。またテレビのない家庭の生徒、児童には班組織で学校のテレビ教室を開放したり、町内会や民生委、PTAの各機関と連絡をとって一般家庭のテレビをみせてもらうなどの態勢をとるよう学校に指示した」⁴⁰とも伝えている。1964年の全国のテレビ普及率は83%で、テレビ史の通説では、東京オリンピックはカラー放送を前進させたイベントとして位置づけられてきた⁴¹。しかし島根県においては松江市でもテレビがない家庭が一定数存在し、そうした家庭の子供たちの体験の格差を埋めるのに学校のテレビが活用されたのである。

もっとも、松江の子供たちだけが、学校でオリンピックを見たわけではない。愛知県や和歌山県でも、現地で観戦することができない子供のために体育館や武道場、会議室や図書館にテレビを準備したり、授業中に観戦できるようPTAや町の電器店と協力して全教室にテレビを準備したりした学校があったことがわかっている⁴²。全国的に東京オリンピックは学習の対象として見られていた。地方の子供たちは会場に足を運ぶことはできなかったが、大人たちは、オリンピックを、学校のテレビを最大限に活用する機会ととらえていたと考えられる。

3-3 娯楽としてのテレビ

本節では聞き取り調査をする中で浮かんできた、テレビの登場が映画館の衰退と結び付いていたのではないか、加えてテレビが娯楽としての要素を強く持っていたのではないか、という疑問について検証する。

森口保によると、1957年6月25日に天神橋北詰に松江日活(のちの松江中央劇場)が開館し、当時は寺町駅通りに松江東宝、国際劇場(松竹系)、興映(のちの東映大劇)、ピカデリー(日活直営)、銀映(のちの松江東映劇場)、松江大映(のちのスカラ座)、伊勢宮町にスワン座(洋画)、殿町の一畑劇場があって9館は競い合う状態だった⁴³。

聞き取り調査でも、多くの方が、松江市に今より多くの映画館があり見に行っていたことについて話している。1951年生まれの中村さんは「私はおばあさんに連れて行ってもらっておばあさんと日曜に映画を見に行く、チャンバラ映画を。そういうのが盛んでおばあさんも楽しみにしちょう(して)、私も連れて行ってもらって映画見たわけだ。だから小学校のうちまでは付き合っちゃった(付き合った)。中学校はいろいろその部活が忙しくて友達の付き合いが忙しくなって、一畑の映画館に行って、長嶋茂雄さんの映画ともう一つ大脱走という洋画があって男5人でどっち見ようかと[悩んだ]と話す。1949年生まれの佐々木さんは「中学か高校[の時に、私は]知らなかったけど私の友達がビートルズとかローリングストーンズのファンで、レコードとかいっぱい聴いてて見に行くことになった。私の友達が加山雄三のファンで、全然興味ないのに見に行かされた」と友達と映画をよく見に行っていたと話した。頻度の差はあっても、市民の余暇として映画館で映画を見るのが一般的だったことがわかる。

新聞も松江市の映画館の賑わいを伝えている。1950年1月3日付の「島根新聞」は、「映画館はホクホク」という見出しで、「各商店は二日からほとんど営業を開始し商品一割引から三割引で初売景気をあげているが、金詰りと雨でお客さんの姿はトンと見られない、半面市内の四映画館は開館早々大入り満員でお年玉付で客引した公映等は平日(約二-三百名)の四、五倍(一千二百-五百名)の客でにぎわい、元日早々から市内に放送宣伝車までくりだした松江東宝等では一日の観客が二千名を突破するという盛況ぶり」⁴⁴と伝えている。10年後の1960年1月5日付の「島根新聞」にも、「市内の九映画館はいずれも満員の盛況。正月の最高記録を更新した。人気の的は子ども向け映画でT映画館はこの一日で約二千人、平日の六倍から七倍の大入りでお昼過ぎには館内は身動きもできず、満員御礼のうれしい悲鳴をあげていた」⁴⁵とある。『松江を中心とした経済統計年報』によると、1958年から1960年の松江の映画館入場者数は、1月と8月に増加している⁴⁶。新聞でも正月三が日は新春映画情報を全面広告で大々的に伝えていて⁴⁷、正月や盆などに映画を見る人が多かったと考えられる。

聞き取り調査では、テレビの影響で映画館が打撃を受けたという人がいた。中村さんは「(映画は)だんだん押されてくるんだけど、テレビの発展だわね。テレビがカラーになったりとか、いろんな番組を企画し始めてくると、身近にあるようなお話がドラマ化されて、それを見てっていうのはだんだんと見るようになってくると映画館自体が、テレビの普及によって変わってきたね」と映画館の衰退とテレビの関係性について語った。

1958年から1960年の松江市における映画館入場者数の推移は、1958年は年間1,679,708人、

1959年は年間1,674,336人、1960年は年間1,360,202人となっている⁴⁸。その後の数字がないので一時的な落ち込みであったかどうかはわからないが、1960年の映画館入場者数減少は顕著である⁴⁹。

次に、テレビは娯楽のうちに入るのかという点について、調査対象者がテレビで見ていた番組として挙げたのは、「ホームラン教室」「名犬ラッシー」「日本昔話」、ディズニーアニメ、野球、相撲、プロレス、クイズ、映画、推理モノ等で、ニュースを挙げる人はいなかった。今回の対象者の多くが初期受容期間には子供や学生だったことも関係していると考えられるが、人々の記憶に残っていた時事的テレビ放送は、皇太子ご成婚といった大きなイベントのみで、娯楽と呼べるアニメや映画をよく見たと記憶する人が多かった。また、1951年生まれの中村さんは「食事をした後で、8時くらいから勉強せないけんけん、夜8時から勉強して9時まで1時間せんといけん(しないといけない)と言われたので、[テレビを見ることができたのは]食事が終わって7時から8時の間くらいだと思う」と、勉強時間とテレビ視聴時間を分けられていたという話をした。このような区分があったことも、娯楽としてテレビが受け取られていたことを表していると考ええる。

3-4 電化製品としてのテレビ

最後に、松江市の電器店でのテレビ販売や購入方法から、松江市でどのようにテレビが普及したかを考察する。飯田は、日常的にテレビがどのように売られ社会に広がっていったかについて、松下電器の系列店に配られた販促誌『ナショナルショップ』誌を用いて分析している⁵⁰。飯田の研究が明らかにした6つの点について、松江市で行った聞き取り調査の結果と比較してみたい。

第一に、テレビは「試用貸し」という販売方法で、テレビを未購入の家に持ち込み視聴してもらってから販売していたと飯田はしているが、聞き取り調査の結果、松江市でもテレビの試用貸しを行っていたことがわかった。テレビやアンテナを先に家に取り付けてしまうので支払いを滞る客が多く、度々問題になっていたようだ。1941年生まれの伊藤さんは、テレビの取り付け工事をしていた当時、「アンテナ先付けてくれ、テレビはあとでいいから[と言われた]、[これは]テレビがある事を自慢するためだわね」と話す。当時テレビは高級品で、家の屋根にテレビ用アンテナがついていることはお金持ちのステータスだったという。

試用貸し以外の販売方法については、電器店の元店主である1943年生まれの高橋さんは「高いもんだからたくさん揃えられないの、量販さんみたいなテレビを揃えられないから、一個おいてそれをすごく大きくデモンストレーション飾り立てして」と話す。現代の家電量販店のように多くのテレビを揃えることはできなかったため、店頭で一台のテレビを飾り立て大きく華やかに見せることで集客していたと語った。

第二に、飯田は農村など伝統的な人間関係が残る地域では、地主が買わなければ買えないなど、その関係性に沿ってテレビが広がった、とするが、松江市では伝統的な人間関係に従った広がり方はしなかったようである。旧松江市域には京店商店街・天神町商店街・白濁本町商店街をはじめとして商店や旅館が多く、既に述べたように商店や旅館はテレビの導入が早かった。

第三に、飯田は、故障を直すアフターサービスがさらなる家電販売の機会となったとする。松江市の聞き取り調査でも、テレビは壊れやすく、初心者では治せなかったため、アフターサービスはよく行われていたことがわかった。1949年生まれの佐々木さんは小学生の頃、町内の電器店で父親が修理のついでに新しい洗濯機や水蒸気が出るアイロンを買ってきた、と話した。

四点目として、飯田は、テレビが描く豊かな生活をもとに電器店の店舗が近代化した、とする。具体的には、テレビをはじめとする家電を実際に家庭で使う様子を想像させるために近代的な店舗に改装するということだ。松江市でも、一部その話を聞くことができた。電器店の店主である高橋さんは、親の代から店を営んでいるが、もともとは戦地でも使用するような無線機を扱う専門店だったそうだ。戦後は無線機だけではなくテレビやアイロン、洗濯機というような家電を広く扱う店に変化している。テレビを店頭で売り出す際にも華やかに飾り立てるなどしていたことから、松江でも店舗の近代化は起きていたと推測する。

五点目として、飯田は月賦制度(今でいうローン・リボ払い)がテレビの普及を推し進めたというが、松江市でも月賦制度が用いられていた。1941年生まれの伊藤さんは「月賦制度いうのができてそれで普及した部分があるね。それこそ私らが勤めた時は、初任給8000円だったけんね(からね)。それからだんだん上がっては来たんだけど、おやじらも[月給]2万までもらわとらなだった(もらっていなかった)じゃない[だろう]か。それでも分割でね」と父親が月賦制度を利用してテレビを購入していたことについて語った。ほかに、高橋さんは「当時農協さんがバックアップしたちゅうのが(というのが)、お米がとれるが(でしょう)。とれるだけお金が入るでしょ。そのお金で[テレビ代金を]差し引いてから。僕らはそのバックアップのできないから農協さんがバックアップして。やっぱ農協ちゅうのは力強いから預貯金ダーツと拾って取っついて、それでテレビ代、テレビ代差し引いたものしか振り込まないって感じかな。[農家の人は]テレビを見れたっていうのはもう騒ぎましたね」と話した。松江の市街地の電器店が、山間部や海辺の共聴工事をして各家庭にテレビをおさめる仕事もしていた⁵¹。農家に対しては農協が米の支払いから差し引いてテレビの購入ができるようにしていたそうだ。

六点目として、飯田はテレビなどの家電の普及に伴い、所帯主から主婦や子供に購入に関する発言権が移っていった、特にテレビをねだる子供が多かったという⁵²。消費の意思決定に家族全員がかかわるようになることは石川弘義も指摘している点である⁵³。購入決定権が誰にあったかについて、今回聞き取りを行った方の多くは当時学生だった方がほとんどだが、自分がねだったというよりも親(特に父親)が突然テレビを買ってきたという話や、家が商売をしていてお店にテレビが置かれ始めたという話をしている人が多かった。テレビ購入の決定権が、子どもに移ったとまでは言えないだろう。

1935年生まれの加藤さんは、テレビの購入より洗濯機の購入が嬉しかったと当時を振り返る。「[テレビは]ご成婚の時に買ってきたのよ。おじいさんが。[ローラー式]洗濯機も一緒に買ってきてくれてね、それは私嬉しかったわね。大勢の洗濯をせんならんのに(しないといけないのに)大変だが(だよ)、手でするのもすすぎも大変だけんね(だからね)。洗濯機も買ってきてくれて、あの洗濯機はテレビよりも嬉しかった」と話す。加藤さんは当時結婚していて、嫁ぎ先が商売

を営んでいたが、その従業員が住み込みで働いていたため自分はその方々や家族の世話が大変だったし、テレビを見に近所の人々が毎日やってくるので、その人たちへのお茶出しと接待が忙しかった。嫁という立場で自分はテレビがほとんど見られなかったという。

本節では、テレビの購入方法や当時の電器店についてなど、商品としてのテレビを見てきたが、ほとんどの点が、飯田が指摘していた通りである。しかし、地方とはいえ農村部ではない松江市では人間関係による購入の順序の決まりは見られなかった。一方で、農家のテレビ購入を農協が支援していたことや、テレビの購入権は多くの場合、家長や親世代が握っていたことは地方らしさが出ている点だと考える。

おわりに

本稿では、聞き取り調査と文献調査を組み合わせ、松江市での初期テレビ受容がどのようなかについて考察した。

都市部の状況を中心に構成されてきたテレビ史の通説は、街頭テレビによってテレビの存在が人々に知れ渡り、皇太子ご成婚パレードをきっかけにテレビが各家庭に普及したというものである。松江市でNHKのテレビ放送局が開局するのは1959年10月末であるが、その前にテレビを視聴していた人は多くいた。規格外のポールを立てて岡山県からの電波を受信する人が少数ながら存在し、鳥取でテレビ放送が始まっていたご成婚パレードの際は、一部の富裕層や商売をする人しかテレビを持っていないという状況だったが、聞き取り調査を行ったほとんどの人が近所の家などでパレードをテレビで見っていた。皇太子ご成婚パレードがテレビ普及の上で重要な役割を果たしていたという点は、全国的傾向と共通していたといえよう。

教育面では、教育委員会も視聴覚教材の大切さを感じ、テレビの教育利用をしていた。佐井村ではテレビを、僻地性を乗り越えるための道具として位置づけていたのに対し、松江市ではこのようにテレビを位置づける語りは見られなかった⁵⁴。しかし東京オリンピックを学校のテレビで観戦するというのは、松江市におけるテレビの教育利用の代表的な試みで、調査対象者の記憶にもよく残っていた。一方で、子どもの日常生活の中では、勉強時間とテレビを見る時間が分けて捉えられるなど、テレビは娯楽のメディアとして捉えられていた。また、市内でかなり興隆していた映画産業がテレビという娯楽に移り変わったという理解をしている人も少なくなかった。

今回聞き取った内容はあくまで個人の経験や考えに基づくものであり、必ずしも松江市民全員に共通するわけではないが、文献には記されていない松江市でのテレビ普及の一端が明らかになっただろう。松江市での初期テレビ受容は都市的な側面と地方的・農村的な側面のどちらの面も持っていたと考えられる。皇太子ご成婚パレードを視聴する人が多かったことや、僻地性から脱却する道具としてのテレビという考え方はなかったこと、テレビの購入方法などに都市部ならではの姿が見られる。しかしポールを立てて県外の電波を受信していたことやテレビの購入決定権は家長や親世代にあり子供は関与してはいなかったこと、農家に対しては農協のバックアップを受けてテレビ販売が行われていたことは地方・農村的な特徴である。

本稿では地方の一例として1950～1970年代の島根県松江市を調査対象とし初期テレビ受容に

ついて分析してきたが、「地方」と言っても大都市圏との距離や産業、県民性などの面はそれぞれの地域で異なる。さらに今後他地域で初期テレビ受容について研究することによって、地方のテレビ草創期について明らかにすることができるだろう。

付記 本稿は、島根大学法文学部に提出された三好の卒業論文(未公刊)をもとに、主に浜田が加筆修正および再構成を行ったものである。調査にご協力いただき貴重なお話を聞かせてくださった皆さんには心より感謝申し上げます。

別表：初期のラジオおよびテレビ放送をめぐる主要な出来事

1925年	ラジオ放送はじまる(東京放送局3月、大阪放送局6月、名古屋放送局7月)
1928年	広島放送局がラジオ放送開始(7月)
1932年	松江放送局がラジオ放送開始(3月)
1951年	民放16社に予備免許(4月)、日本初の民間ラジオ放送はじまる(9月) NHK テレビカーが松江にくる(12月)
1953年	NHK がテレビ放送開始(東京放送局2月) 日本テレビが放送開始、新橋駅前に街頭テレビを設置(8月) 山陰初の民送としてラジオ山陰が米子に開局(12月)
1956年	NHK 広島放送局テレビ放送開始(3月)
1957年	NHK 岡山放送局テレビ放送開始(12月)
1959年	日本海テレビとNHK 鳥取放送局がテレビ放送開始(3月) 皇太子ご成婚パレード(4月) NHK 松江放送局がテレビ放送開始(10月) ラジオ山陰がテレビ放送開始(12月)

注) 松江や山陰・中国地方に関する動向は太字で示している。

- 1 飯田豊『テレビが見世物だったころ：初期テレビジョンの考古学』青弓社、2016年、13-14頁。
- 2 石田あゆ『ミッチー・ブーム』文藝春秋、2006年。
- 3 日本放送協会編『20世紀放送史 上』日本放送協会、2001年、411頁。
- 4 「参考資料『街頭テレビ』に関する日本テレビの調査結果」『放送番組向上協議会月報』2003年2月、29-31頁、日本テレビ50年史編集室編『テレビ夢50年データ編』日本テレビ放送網、2004年、97-99頁。
- 5 NHKの主な放送局のテレビ開局年は、村上聖一「NHK 地域放送の編成はどう変わってきたのか：放送時間、放送エリアの変遷をめぐる分析」『放送研究と調査』63巻8号、2013年8月、20頁、表1を参照。別表に、初期のラジオ・テレビ放送をめぐる主要な出来事について、本稿で取り上げる松江や山陰・中国地方における動向も含めてまとめている。
- 6 太田美奈子「青森県下北郡佐井村における初期テレビ受容」『マス・コミュニケーション研究』92巻、2018年1月、165-182頁、太田美奈子「「通信」と「放送」が交錯する初期テレビ受容：1950年代青森県八戸市の事例から」『早稲田大学文学研究科紀要』64号、2019年3月、837-852頁、太田美奈子「無線/有線からみる地方のテレビ受容：青森県三戸郡田子町の事例から」『ソシオロゴス』45号、2021年

11月、1-20頁、樋口喜昭『日本ローカル放送史：「放送のローカリティ」の理念と現実』青弓社、2021年、松山秀明『はじまりのテレビ：戦後マスメディアの創造と知』人文書院、2024年。

⁷ 飯田前掲書、347頁。

⁸ 注6に挙げた太田論文を参照。

⁹ 飯田崇雄『「モノ＝商品」としてのテレビジョン』『放送メディア研究』3号、2005年、119-150頁。

¹⁰ テレビとの出会いや視聴体験をインタビュー調査により明らかにした研究として、太田の研究のほかに、大坪寛子＝国広陽子「高齢者にとってのテレビ：記憶の中のテレビと現在のテレビ視聴」『メディア・コミュニケーション：慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』62巻、2012年3月、107-119頁がある。インタビュー対象者は1925～35年生まれの男女（多くが山口県周防大島に居住）で、インタビューは2008～10年に実施されている。

¹¹ テレビに対する人々の警戒心を捉えて、大宅壮一の「一億総白痴化」論は1957年に流行語化していく。ただし当時、大宅が批判した低俗テレビ番組を視聴できたのは、都市部の所得の高い層に限定されていた。むしろ「一億総白痴化」の流行により、テレビというメディアは、教育的活用の模索をしていくよう方向付けられることになった。佐藤卓己『テレビ的教養：一億総博知化への系譜』NTT出版、2008年、松山前掲書。

¹² 内藤正中『鳥根県の百年 県民百年史32』山川出版社、1982年、316-319頁。鳥根県は都市部においても、家事労働合理化指数、洋風化指数、レジャー指数は低かった。

¹³ テレビ放送開始以前は「放送」といえば「ラジオ放送」のことであった。日本では1925年3月に東京放送局、6月に大阪放送局、7月に名古屋放送局がそれぞれラジオ放送を開始している。その後全国に放送局が設置されていく。松江放送局の開局は1932年3月7日で、全国で17番目と比較的早い時期であった。

¹⁴ 佐藤悦子「幼児とテレビ：地方の実態調査から」『放送教育』14巻10号、1960年1月、34-37頁。同論文の内容からは、園児らが、テレビを実際に視聴していたことが確認できる。後述するように、松江市中心部では、おそらく隣県からの電波を受信する形でテレビを見ていた者が相当数存在したのであろう。

¹⁵ ただしNHKのテレビ受信契約統計をみると、初動としては松江市外（特に県西部）が受信契約締結は早かった。1958年3月末には鳥根県全体で25のテレビ受信契約が結ばれていて、その内訳は、出雲市1、益田市20、大田市1、八束郡（美保関町）3である（日本放送協会編『昭和32年度受信契約数統計要覧』日本放送出版協会、1958年、232頁）。

¹⁶ 樋口前掲書、124-153頁。

¹⁷ 日本民間放送連盟編『民間放送十年史』日本民間放送連盟、1961年、536-541頁。

¹⁸ この時点では鳥取テレビジョン放送の名称で申請が行われ会社もまだ設立していなかった。日本海テレビジョン放送会社の設立は、予備免許交付後の1958年3月であった。日本海テレビ40周年誌編纂委員会編『日本海テレビのあゆみ』日本海テレビジョン放送、1999年、128頁。

¹⁹ 日本民間放送連盟編前掲書、544-545頁。

²⁰ 山陰中央新報社百年史編さん委員会編『新聞に見る山陰の世相百年』山陰中央新報社、1983年、512頁。

²¹ 佐藤前掲論文。

²² 松江商工会議所編『松江を中心とした経済統計年報（昭和36年度版）』松江商工会議所、1961年、216頁。

²³ 飯尾潤によると「何らかの証言者が、聞き手の問いに答えて話したことを記録した口述記録」（飯尾潤「オーラル・ヒストリーは何を目指すのか」御厨貴編『オーラル・ヒストリーに何ができるか—作り方

から使い方まで』岩波書店、2019年、11頁)のこと。

- ²⁴ 飯尾前掲論文、14頁。
- ²⁵ 同上、15頁
- ²⁶ メディア史研究におけるオーラル・ヒストリーの活用については、『メディア史研究』43号(2018年3月)の特集を参照。特に本稿に関係する論文として、有山輝雄「読者・視聴者(オーディエンス)研究の方法としてのオーラル・ヒストリー」(同誌、53-63頁)、浜田幸絵「放送研究の方法としてのオーラル・ヒストリー：放送関係者への聞き取りとその活用」(同誌、19-35頁)。
- ²⁷ 調査対象者の発言内容を引用する際には、単純な文字起こしでは意味が捉えづらい箇所に限って、[]をしたうえで言葉を補っている。また方言の後には()をつけて標準語も併記することとする。
- ²⁸ 山陽地域におけるテレビ放送開始について示しておく、NHK 岡山放送局が開局したのは1957年12月22日で、民間放送では山陽放送が1958年6月1日、岡山放送が1969年4月1日に開局している。NHK 広島放送局は1956年3月21日に開局し、民間放送では1959年4月1日にラジオ中国(1967年に中国放送に改称)、1962年9月1日に広島テレビ放送、1970年12月1日に広島ホームテレビ、1975年10月1日にテレビ新広島が開局している(NHK 編『放送の五十年：昭和とともに』日本放送出版協会、1977年、巻末資料3、8頁)。
- ²⁹ 「島根新聞」1959年3月4日付。
- ³⁰ 山陰中央新報社百年史編さん委員会編前掲書、512頁。「島根新聞」1953年11月19日付に、出雲市今市町で、山陰で初のテレビ遠距離受像に成功したという記事がある。このときは大阪局の電波を受像したようである。高橋さんのいう、岡山からの電波を拾ってテレビ視聴していた家があったというのは1957年の末から1959年の初め頃のことであろう。
- ³¹ 山陰中央新報社百年史編さん委員会編前掲書、513頁。
- ³² 皇太子ご成婚パレードを、松江市の人々が、近所の人の家や電器店でテレビで見たことは、新聞資料からも確認できる(「島根新聞」1959年4月10～12日)。日本海テレビは、白濁公園横の島根青年館に5台、一畑百貨店では計10台を設置し、一般に公開したという。
- ³³ 吉葉山が優勝したのは昭和29年の初場所である。
- ³⁴ 日本放送協会編『NHK 年鑑1953年版』日本放送出版協会、1952年、129-132頁、「島根新聞」1951年12月12、15、18日付。NHKのテレビカーは、送像装置を積み込んだ車と受像機を積み込んだ車とが一緒に各地を巡回して、本放送開始前に公開実験を行うものであった。なお、テレビカー以前にも、戦前から各地の博覧会や展覧会などで、たびたびテレビの公開実験は行われていて、こうした機会に一般の人々はテレビを見る体験をしていた(飯田前掲書参照)。
- ³⁵ 「山陰に刻むテレビカーの跡」『ナショナルショップ：共に研究し共に繁栄めざすナショナルショップ』8巻2号、1954年2月、40頁。
- ³⁶ 太田前掲「青森県下北郡佐井村における初期テレビ受容」。
- ³⁷ 島根県教育委員会『昭和38年 国と島根の教育』島根県教育委員会、1963年、222-224頁。
- ³⁸ このデータは教育事務所別(松江・出雲・浜田・益田・西郷)になっている。当時の松江市内の小学校数は本校22、分校1の計23校であったが、松江教育事務所の管轄には安来市や能義郡も含まれていたと思われる。テレビがどの学校にも満遍なく置かれていたのか、一部の市郡や地域的な偏りがあったのかは不明である。
- ³⁹ 授業等でテレビを使用しない時はテレビにカバーをかけてあったという。
- ⁴⁰ 「島根新聞」1964年8月25日付。大会開幕直前の新聞記事によると、島根県教育委員会も3日以内であ

れば振替授業を前提に休校を認めていた。しかし益田市の小学校はPTAの発案で、テレビのない家庭に配慮して学校で休校にはせず学校でオリンピックをみたという（「島根新聞」1964年10月9日）。

- ⁴¹ 日本放送協会編『20世紀放送史(下)』日本放送出版協会、2001年、532頁、NHK 編前掲書、292-295頁。オリンピックをきっかけにカラー放送を行った地方局はNHK 広島・岡山局などいくつかあるが、島根県の放送局は、カラー放送は行っていない（日本電信電話公社編『第18回オリンピック東京大会電気通信対策報告書』日本電信電話公社、1965年、53-54頁）。
- ⁴² 木村華織「学校に届いた東京オリンピック」坂上康博／來田享子編『東京オリンピック1964の遺産 成功神話と記憶のはざま』青弓社、2021年、167-171頁。
- ⁴³ 森口保『松江365日』ハーベスト出版、2002年、100頁。
- ⁴⁴ 「島根新聞」1950年1月3日付。
- ⁴⁵ 「島根新聞」1960年1月5日付。
- ⁴⁶ 松江商工会議所編『松江を中心とした経済統計年報(昭和34年度版)』松江商工会議所、1959年、213頁、松江商工会議所編『松江を中心とした経済統計年報(昭和35年度版)』松江商工会議所、1960年、211頁、松江商工会議所編前掲『松江を中心とした経済統計年報(昭和36年度版)』213頁。
- ⁴⁷ 「島根新聞」1960年1月1日付。
- ⁴⁸ 注46参照。
- ⁴⁹ 北浦寛之は、1960年代に映画産業が衰退していく要因の一つにテレビがあるとしながらも、映画館の減少率は地方で大きかった（大都市での減少率は30%にとどまったが、地方では60~70%にのぼった）としている。北浦寛之「興行者たちの挑戦：1950年代から60年代の日本の映画産業」黒沢清他編『観る人、作る人、掛ける人』岩波書店、2010年、43-68頁。
- ⁵⁰ 飯田前掲「『モノ＝商品』としてのテレビジョン」。
- ⁵¹ 高橋さんは20歳くらいの頃、30~40軒分の共聴工事を、3、4人で出かけ行っていたという（当時は14型が主流）。伊藤さんは、昭和38、9年か40年代くらいに、郡部（今の雲南市、加茂や木次）や島根の共聴のアンテナを立てる仕事をしていたという。
- ⁵² この点に関連して、吉見俊哉は、世田谷区の団地を対象にした1958年12月の調査報告をもとに、1950年代末には主人や子供たちがテレビの購入を望んでも経済的な理由から主婦が抵抗する傾向がみられたとしつつも、テレビのコンテンツが「男性的」ジャンルから離脱し、ホームドラマも発達していったこれより後の時期には、変化がみられた可能性があるとしている（吉見俊哉「テレビが家にやって来た」『思想』956号、2003年12月）。
- ⁵³ 石川弘義『欲望の戦後史：社会心理学からのアプローチ』太平出版社、1981年、78頁。
- ⁵⁴ 島根県内でも、現在の雲南市大東町周辺地域に当たる大原郡の小学校（分校）では、1961年12月にへき地教育振興法によりテレビが設置されている。その目的は「へき地で子どもは限られた語意（ママ）（教師、友人、家族）に制約され、回転が鈍っている。そこで、もっとちがった人の意見やことばを聴き、これを尊重し、ちがった思想形態になれさせる」（松浦美正『先生いつまでおるの』報光社、1967年、55頁）と説明されている。

Early Television Reception in Matsue, Shimane Prefecture, Japan

MIYOSHI Ami*, HAMADA Sachie**

(*Graduate from Faculty of Law and Literature, Shimane University)

(**Faculty of Law and Literature, Shimane University)

[Abstract]

This research explores early television reception in Matsue, Shimane Prefecture, Japan, using the mixed methods of documentary research and oral history. The history of television in Japan has been constructed to deal with events that took place in populated cities. According to a commonly accepted view, Japanese people began to watch the *gaito terebi*, or street televisions, set up by Nihon TV in the early 1950s, and then the diffusion of home television caused by Japan's Crown Prince Akihito, Princess Michiko's wedding parade in 1958. However, street TV had hardly been installed outside the metropolitan area, and many areas, including Matsue, had not yet started television broadcasting by the time of the royal wedding. While there are few documents on how people in rural areas of Japan encountered early television, this research conducted oral history interviews and have revealed that the early reception of television in Matsue area has urban aspects as well as those of rural.

Keywords: Television History, Provincial City, Oral History, Education, Leisure